

東北地方のアイヌ語地名の痕跡

鏡 味 明 克

1 はじめに

アイヌ語地名の痕跡化について、本誌において連続考察してきた続編を今回も提示する。先回の「アイヌ語地名の痕跡化」(21号, 2006)において、「アイヌ語基本地名で従来東北地方に見出されなかった地名の探索」という章を設けて、ピリカ、フシコ、アシリ、ホロカ、クッチャロ、ペンケ・パンケ、ヌタブ、エンルム、ヌプリ、ピパ、コタン、フレの13語を挙げた。そのうち、コタンについては、本誌18号の「アイヌ語地名の日本語接触変化」(2003年)で、21号の鏡味2006ではパンケ・ペンケとエンルムについて、その東北地方における痕跡を考証した。

今回は、その続編として、フレ(赤)とアシリ(新しい)・フシコ(古い)についての探索結果を述べるものである。この考察を前半部として、後半部では、筆者が痕跡化の指標の一つとして、早くから重視してきた当て字の漢字が読み替えられる変化の例のうち、研究の早い段階から注目した「小石」の「ピ」にあてた「檜」(ひ)が「ひのき」と読み替えられた地名のアイヌ語形復元の問題(「東北地方におけるアイヌ語起源の地名の日本語化」『語源探求』第3集, 1991)の例は、とくに秋田県仙北郡西木村(現在の仙北市)の事例を取り上げたものであったが、この事例は東北地方のかなり各地に共通することがわかってきたので、その分布を確認しながらこの変化の再確認を行うことにした。

2 アイヌ語フレ(赤)の痕跡の調査

北海道の音訳地名では、振内(ふれない・平取町)、布礼別(ふれべつ・富良野市)などがある。また、赤平(あかびら)市の名は、フレ・ピラ(赤い崖)の半翻訳とされるが、ワッカ(水)の音訳だという説もある。古平町のように「古」の字により「ふるびら」と読んだ例もある。

東北地方におけるフレナイの痕跡については、山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』(1957)に例示した論があった。山形県尾花沢市の丹生川上流の「紅内(くれない)」である。地形図でその環境を示すと、図1のような立地で、「くれない」のふりが

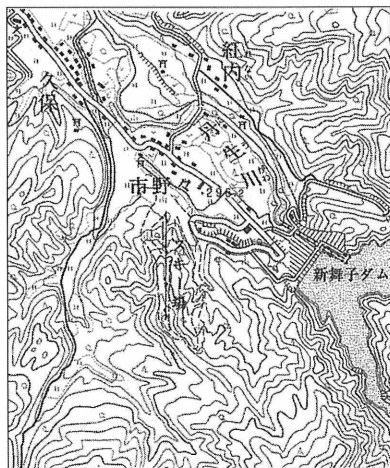


図1 紅内 (くれない)

国土地理院発行の5万分1地形図「葉菜山」
を利用したものである。



図2 紅 (くれない)

陸地測量部 昭和8年要部修正5万分1
地形図「千厩」を利用したものである。



図3 官紅

国土地理院発行の5万分1地形図「千厩」
を利用したものである。

なも付されている。丹生川の存在にも触れて、水底の岩や小石も赤かったと探索記に述べている。

もちろん「くれない」自体が「赤」の和語であるが、それを「紅」の1字で表わさずに、「内」の字も使っているところが、アイヌ語の「川」地名の痕跡と見てよいであろう。

「紅」の字の例を東北地方に見出すことはなかなかできなかったが、やがて西鶴定嘉『東北六県アイヌ語地名辞典』（1995年）に岩手県東磐井郡川崎村（現在は一関市）の「紅」をクレナイ（Kurenay 魔がそこに（いる）川）とする例が見つかった。アイヌ語のこのような語構成の例は北海道に見出しがたいので、この解には従い難いが、フレナイの一つとして考えられるのではなからうか。この地名は、昭和8年修正の5万分1地形図「千厩」（図2）に見えるこの「紅」と思われるが、図3のように、現在の5万分1では「官紅」と書いている（2万5千分1「千厩北部」でも同じ）。『角川日本地名大辞典・岩手県』の「字名一覧」でも磐井郡門崎（カンサキ）村官紅（クワンコウ）とあり、官紅の名も古くからあるようである。何らかの名を併せた名称の音読で、もとは「くれない」であろうか。そうであれば、フレナイの痕跡の可能性もある。図のように、砂鐵川の谷筋にあり、「赤錆色」の土質も考えられる。

「赤平」の例はかなり見出すことができる。まず、図4の「赤平」は下北半島の北端に近い青森県下北郡風間浦村白糠の赤平（あかびら）である。図のような急崖の地で、小平地とは考えにくく、アイヌ地名のピラ（崖）で、フレピラの半翻訳の地名であろう。次に、図5の赤平は仙北市角館の赤平（あかひら）で、ここも玉川ぞいの急崖である。ほかにも近傍にいくつかの赤平がある。秋田市に河辺赤平（あかひら）があり、また仙北市田沢湖刺巻の明平（あけひら）は戦国時代の赤平郷の遺称地らしい。

3 アイヌ語アシリ（新しい）の痕跡

北海道の音訳例にはアシリベツが厚別川と書かれたり、またアシリコタンが走古丹（はしりこたん）と書かれた（別海町）などの例がある。

東北地方ではなかなか該当例が見つけれないが、新潟県まで目を向けると、図6の新潟市巻町の安尻（あじり）はひょっとするとアシリが起源かもしれない。このあたり水路の多い地域で、新旧の河道の変動もあったかもしれない。また、岩手県一関市の旧室根村には「走沢」（はしりさわ）の字名が認められる。文字通りの水が走る急流の「走り沢」かもしれないが、アイヌ語アシリの痕跡かもしれない。

なお福島県いわき市にも鹿島地区に「走り熊」の地名がある。クマは「隈」であろう。

4 アイヌ語フシコ（古い）の痕跡

北海道の漢字音訳例は「伏古」と書くものが多く、愛別町、雨竜町、帯広市、釧路村、長沼町などに例がある。単なる音訳でなく、「古」の字に翻訳の意味も反映してい



図4 赤平

国土地理院発行の2万5千分1地形図「佐井」を利用したものである。



図5 赤平

国土地理院発行の2万5千分1地形図「角館」を利用したものである。



図6 安尻

国土地理院発行の5万分1地形図「弥彦」を利用したものである。



図7 伏熊

国土地理院発行の2万5千分1地形図「左沢」を利用したものである。

る。いずれもフシコ・ペツ（古川）から出ている。

東北地方での類似地名として、「伏熊」（ふしくま）の例を見てみたい。山形県寒河江市の西、大江町の伏熊は図7のように最上川の沿岸の集落である。あるいは河道の変動が過去にあったのであろうか。「古川」の意に、河道の曲がり角の「隈」（クマ）が加わって、当て字「熊」が付与されたものようである。先に引いた「走り熊」のクマと同じである。そのほか、フシコに近似した発音の例では、福島県喜多方市熱塩加納大字山田字伏気（ふしけ）、栃木県塩谷郡高根沢町伏久（ふしく）などがあるが、本当につながりがあるかどうかは不明である。

5 アイヌ語「ピ」（小石）にあてた「檜」（ひ）の字の「ひのき」への読みかえの分布

先述のように、アイヌ語地名の濃い分布域においてみられる「檜」の字の「ひのき」の読みは、ピ（小石）の音訳として使われた「檜」の字が、より日本語化して、「ひのき」の訓に読み替えられたとする考証を早くから提唱してきた（鏡味1991）が、その地名がたしかにピナイ（小石川）の地名とともに見出されることから、「ひのきない」地名は「ひない」地名の読み替えと解釈してきた。鏡味1991にも掲げた、そのような対の地名の例は、秋田県仙北市西木地区の檜木内（ひのきない）川のように、さらに「ひのき」の読みの影響で「木」の字をも加えた例もあり、その同じ語源の地名として、その支流に「比内沢」の地名があることに注目した。この状況を地形図によってここでも図8に再掲しておく。

この変化の流れを東北地方やその付近の関係地名の分布の中で理解するために、以下の関連語形と思われる地名の分布図を作成することにした。

なお、取り上げる地名例は、ピナイからの変形として、ナイが音読されたり、「沢」と訳されたりしている例を取り上げ、「檜山」や「檜木平」など檜の植生による可能性の高い例は取り上げない。

青森県下北郡横浜町の「檜木」（ひのき）のような例は、図9のように、「檜木川」があって「檜木」の集落名があることが明らかであるから、ピナイからの地名と解する。なお、地形図では最近「檜」の字を、このように異体略字の「桧」で表記しているものが多いが、本稿の本文では、本来の「檜」（常用漢字表外字）で統一表記する。

北海道のピナイの音訳字は大半が「比内」である。ただし、北海道にも「檜」の字をあてた「檜内（ひない）ノ川」（上ノ国町）の例があり、さらに、上磯町の「檜沢（ひのきざわ）川」は、東北地方の例と同じく「ひ」の「ひのき」への読み替え変化とみる。いずれも日本語との接触の早い道南の地名である。

以下、図10の東北・北関東の「ピナイ」地名の痕跡分布図に記載したのは次の諸例である。

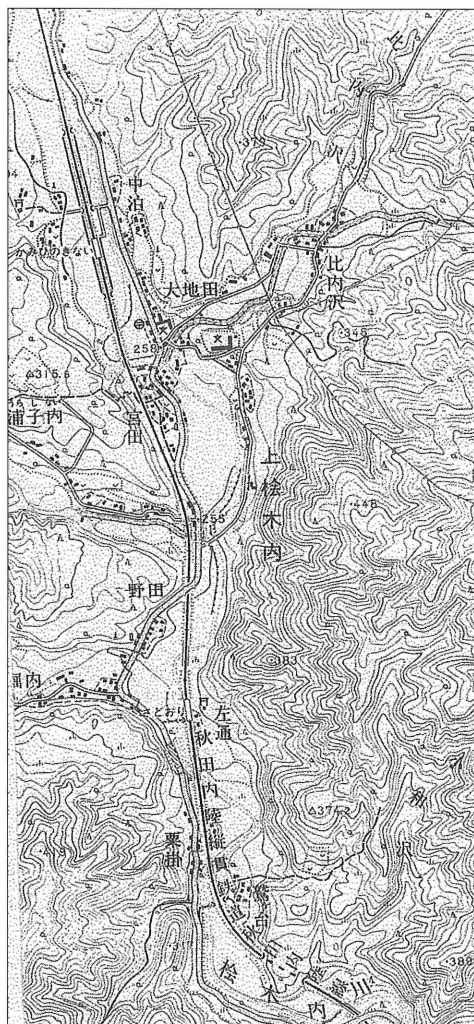


図8 檜木内と比内沢

国土地理院発行の2万5千分1地形図「上桧木内」を縮小利用したものである。

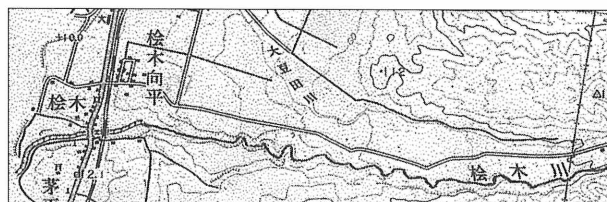


図9 桧木と桧木沢

国土地理院発行の5万分1地形図「陸奥横浜」を縮小利用したものである。

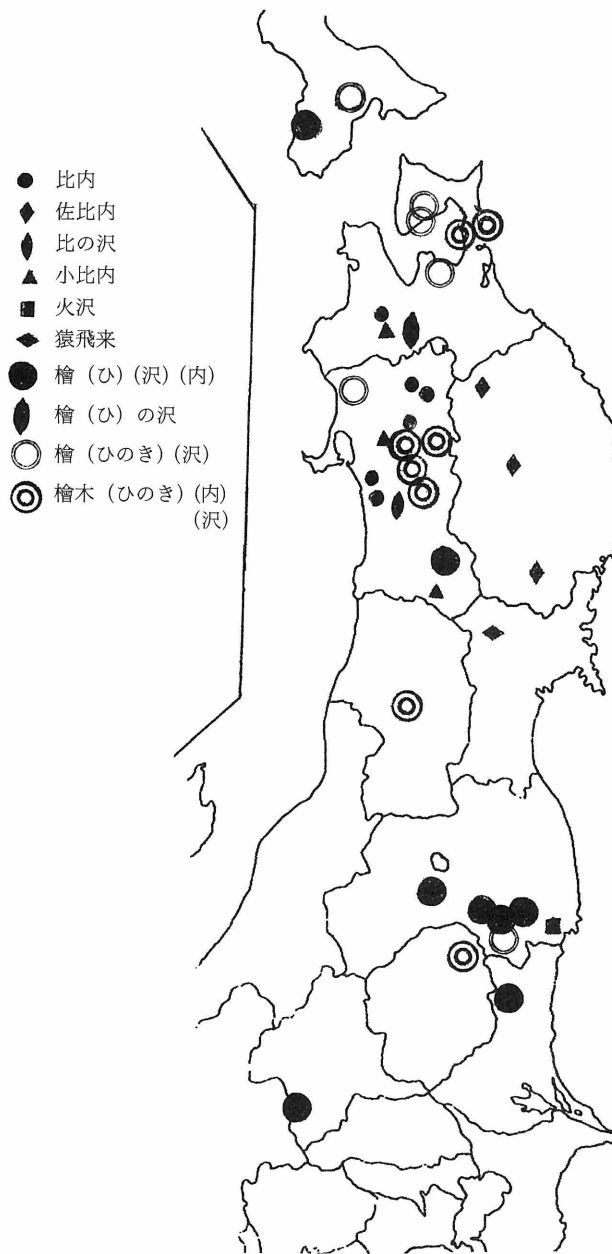


図10 アイヌ語「ピナイ」（小石川）起源の地名の分布

「比内」 青森県弘前市宮館比内沢，秋田県大館市比内町，大館市比内前田，仙北市西木町比内沢。

「佐比内」 (さひない。サツ(乾いた)を接頭したもの) 岩手県二戸市田山町佐比内，紫波郡紫波町佐比内，遠野市佐比内。

「比の沢」 (ひのさわ) 秋田県大仙市神岡町比の沢。

「小比内」 青森県弘前市小比内(さんびない)，秋田県仙北市西木小比内(こひない) 沢。秋田県湯沢市小比内(こびない) 山も谷地名からの名であろう。

「火沢」 福島県いわき市三和町下永井火沢(ひざわ)。

「猿飛来」 宮城県栗原市猿飛来(さっぴらい)。「佐比内」からの変化である。

「檜(ひ)沢」 秋田県横手市山内檜沢(ひさわ)，福島県南会津郡田島塩江檜沢(ひざわ)，東白川郡棚倉北山本檜沢(ひざわ)，同中山本檜沢(ひざわ)。同郡塙町檜沢田(ひざわだ)。

「檜(ひ)の沢」 青森県南津軽郡大鰐町居土檜ノ沢(ひのさわ)。

「檜(ひのき)」 青森県下北郡川内町檜川(ひのきがわ)，河川名檜川も。東津軽郡平内町狩場沢檜沢(ひのきさわ)，秋田県山本郡八峰町檜沢(ひのきさわ)，福島県東白川郡塙町大蕨檜沢(ひのきざわ)。

「檜木(ひのき)」 青森県上北郡横浜町檜木(ひのき)と檜木(ひのき)川，秋田県仙北市西木町檜木内(ひのきない)，上檜木内と檜木内川，仙北市田沢湖生保内の檜木内川(玉川の支流)，山形県寒河江市谷沢檜木沢(ひのきざわ)，栃木県大田原市黒羽町檜木沢(ひのきざわ)。

図のように，東北から北関東に至るほぼ全域に断続的に，ピナイから「ひのきない・ひのきさわ」の分布が認められる。もっとも福島県以南の分布は以北との間に断絶があるようでもあり，あるいは北関東にまたがる分布は文字通りの「ひのき」の意かもしれない。しかし，南の分布も「沢」地名であり，文字の構成も北の分布と共通している。

分布図上では，「檜」の字にあてた地名を大きい符号で統一した。そのうち，「ひ」と読むものは，ピの音訳の直接の継承であり，「比内」等と同じ黒の符号で表示した。そして，「ひのき」と読み替えたものは大符号の白ぬきで表示した。この読み替えは，図のように，南北を問わず各地域で起こっていることが知られる。しかし，北の分布の方がより「檜」の読み替えを行っており，北の分布の方がより確実にアイヌ地名の継承とその読み替えが進行した結果であることをうかがわせる。

東北地方のアイヌ語地名の痕跡調査は次回にも続けてその結果を継続報告するつもりである。

引用文献（掲出順）

- 鏡味明克（2006年）「アイヌ語地名の痕跡化」『人間文化』21号
鏡味明克（2003年）「アイヌ語地名の日本語接触変化」『人間文化』18号
鏡味明克（1991年）「東北地方におけるアイヌ語起源の地名の日本語化」『語源探求』第3集
明治書院
山田秀三（1957年）『東北と北海道のアイヌ語地名考』楡書房
西鶴定嘉（1995年）『東北六県アイヌ語地名辞典』国書刊行会
『角川日本地名大辞典・岩手県』（1985年）（『岩手県管轄地誌』（明治9～18年）所収「字名一
覧」

